

Title	手紙をめぐって
Sub Title	Über "den Brief"
Author	大宮, 勘一郎(Omiya, Kanichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2002
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.83, (2002. 12) ,p.123(54)- 139(38)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00830001-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

手紙をめぐって

大宮 勸一郎

——Die Fuge ist der Fug. (Heidegger : *Der Spruch des Anaximander*)

文学研究やメディア史において手紙という形式はしばしば逆説的 paradoxal なものであると考えられる。手紙に現在もまだ不可避免的につきまとう回路からの逸脱、つまり遅延・散逸・誤配などが、むしろ手紙の本質的可能性として強調されてきたのである。手紙の paradoxal な本質、すなわち「届かない伝承」を強調して論じるのは、例えばヴァルター・ベンヤミンやジャック・デリダである⁽¹⁾が、本稿においては、手紙についての別様の把握を考えてみたい。それは、手紙を存在論 *Ontologie* へと回付することで得られるものである。

精神分析家ジャック・ラカンとは、「手紙は常に宛先に届いている」、と明言する。周知の通りラカンは、1956年「『盗まれた手紙』についてのゼミナール」において、彼の言う欲望の弁証法に従って、手紙とは分割不可能であり、仮に名宛人が手中にしていなくても、それは迂回させられているだけであって、実際には既に宛先に届いている、と言い切るのであった。エドガー・アラン・ポーの著名なテキスト “*The Purloined Letter*” (1845) を土台としたこのゼミナールにおいて、ラカンは何よりも手紙をシニフィアン *signifiant* / *Signifikant* の物質性というものと結びつける。そこでは手紙 *la lettre* とは同時に文字 *la lettre* でもある。手紙についての思考は、そのまま文字というメディアについての思考となるのである。

とはいえ我々が先ずシニフィアンの物質性に固執してきたのだとすれば、それはこの物質性が少なからぬ点において特異なものだからです。就中特異なのは、シニフィアンが分割されることを許さない、という点にある。皆さんが手紙を小さな断片へと切り刻んだところで、手紙は手紙のままですし、このことはゲシュタルト理論が偽装された生氣論たる全体という概念で標榜するものとはまるで関係がない。

(…)

(la lettre 単数に部分冠詞を伴う用法がないことを受け—引用者) このことは、シニフィアンがその本性からして不在を象徴するものでしかない、という自らの唯一性に基く単位であるということに由来するものです。このことゆえに手紙については、他の対象についてのように、それがどこかある場所に存在するか、あるいはしないかのどちらかでしかありえぬ、のではなく——そのような対象とは逆に——どこへ行こうとそれが存在するところに存在するであろうし、且つ存在しないだろう、と主張しうるのはです。(Jacques Lacan: *Le Séminaire sur «La lettre volée»*. In: *Écrits*. Paris (Seuil) 1966, p. 24 / *Das Seminar über E. A. Poes "Der entwendete Brief"*. Dt. v. Gasché, R. In: Lacan: *Schriften I*. Weinheim u. Berlin 1996, S. 22f.)

しかし書字、活字などの文字が物質的であるとしても、それはシニフィアンの全てではない。シニフィアンについてラカンはまた、「不在のもうひとつの記号に送り返すひとつの記号」であり、連鎖を形づくり、そしてこの不在のもうひとつの記号の場所に主体 Subjekt を生成せしめるものである、と言う。そのうえで、シニフィアン=手紙=文字は分割しえぬ物質でもある、とされるのである。ゼミナールはこう締めくくられる。

(解決=回答は) 既に我々の物語の表題に含まれていたものであり、そこから容易に取り出すことのできるものだったのです——このことはしかも、我々が皆さんに既に以前から熟知していただいた間主観的コ

コミュニケーションの公式に従うものです。それに従うなら、つまり、送り手は自らのメッセージを、受け取り手から逆さまのかたちで再び受け取るのだ、ということです。従って「盗まれた」、まさしく「配達不能な手紙」が言わんとするのは、手紙=文字 *lettre* とは常にその宛先へと届いているのだ、ということなのです。(Ibid., p. 41 / Ebd., S. 41)

補足として言えば、ラカンがヘーゲルを独自に吸収していたことが知られており、欲望の弁証法もまたこの脈絡で考えられることが多いかもしれない。また、「シニフィアン」の概念がソシュールの言語学からの（大幅に自由な）援用であることも、半ば共通了解となっている。ところで本稿がこの先目指すのは、ヘーゲル、ソシュールという、ラカンが受け継いだ思想家・理論家の「主流」とは別に、手紙 *letter* についてのラカン的な把握のもう一つの共鳴関係を考えることである。すなわち本稿は、哲学者マルティン・ハイデガーの木霊をそこに聴くことを試みる。筆者はかつて、ラカンとハイデガーの関係を「物 *das Ding*」という術語に関して論じたことがある⁽²⁾が、今回はラカンにおける「手紙」という主題——さらにはシニフィアンという主題——の構築に対するハイデガーのありうべき関与について考察するものである。関与がなされたのであるとすればどのように、どの水準においてか、ということが本稿を導く問いである。

「どこへ行こうとそれが存在するところに存在するであろうし、*且つ*存在しないだろう」——不在の／不在というシニフィアンをめぐるこの論理と、ハイデガーの存在と無 *Sein / Nichts* をめぐる論理との親縁性は、複数の論者が示唆しているところである⁽³⁾。ラカンは、この存在論的結構を主体の弁証法的成立を説明するのに用いたのであるから、対応するのは『存在と時間 *Sein und Zeit*』（1927）における現存在分析 *Daseinsanalyse* であろう。無論「主体」*le sujet / das Subjekt* という心理学的人間学的用語はハイデガーの斥けるところだが、ラカンの「主体」もまた、「自我 *das Ich*」の仮象性を告知する批評的概念であって、それが何であるのか

は決して既知のことではない。「主体」とは常に問われ続けねばならないものである。ラカンの所謂言語学的転回は、フロイトがFort-Daの遊戯に認める反復強迫⁽⁴⁾を、存在論（の少なくとも傍ら）へともたらすことによってのみ、為し遂げられたものであった。ラカンによるシニフィアンの言語論の背後には、ソシュールやヤコブソンら構造主義言語学だけではすくい取れない、ハイデガーの言語論が見え隠れするのである。以下本論はこの点を殊更に強調するが、それは精神分析の欲動の概念が存在論と結びつくことで析出されたシニフィアンの言語論が、技術 Technik についての思考を可能ならしめたことを示すためである。

ラカンの論理は、シニフィアンの／手紙＝文字の無損性を手放そうとはしない。というよりも、手放すことなど論理的に不可能であると考え。そしてそのうえで、手紙は常に宛先へと届いているのだ、という。この論理を可能とするのが物質としての手紙＝文字の特殊性であった。

通常の意味で「物質的」であることと、「不可分」であることとは排除的な関係にあるようにも思われる。例えばデリダにとり物質とは、常に不斷に分割も複製も拡散も可能なものである。そうでないのであれば、「アトミズム」が前提とされているか、「物質」と言いながら実はそれが「観念」さらには「音声」であるか、どちらかの場合であり⁽⁵⁾、そこでは手紙＝文字＝シニフィアンとは、感性的であり且つ超感性的なものである、という二重体をなすものであることになる。例えばマリー・ボナパルトは、手紙を「母の想像的ファルス」⁽⁶⁾であると言っている。この延長で考えるならば Materie=mater（物質＝母）という語源的解釈が可能であるかのようにも思える。しかしこのゼミナール以前にポーの当該テキストに言及しているボナパルトを、ラカンは黙殺したのであった。

ラカンは「シニフィアンとは何か」という問いは立てないし、ましてやこれに対する回答を与えようとはしない。まさしく「語られうるようなメタ言語は存在しない」(Lacan: *Écrits*, p. 813 / *Schriften III*, S. 188) のである。シニフィアンの物質性は、それが場所と次々に特殊な仕方で結びつきながら存在するという点において特異なのであった。そして、シニフィ

アンの「場所を欠いている」という消極性を「欠けた場所を（常に）持つ」という積極性へと転じることが——すなわち手紙が「欠けた場所」に常に届いている，ということが——可能となるには，ハイデガーへの迂回が必要だったのであると思われる。

盗まれた手紙はポーの物語においては、「暖炉の飾り棚のすぐ下の真鍮のノブにぶら下がっていた (hang... from a little brass knob just beneath the middle of the mantelpiece)」。

これをラカンが「暖炉の両脚の間」に手紙は見出されたのだ，と換言する。暖炉の両脚の間，すなわち竈——これは単にラカンが表面的に玩弄する「御婦人の両脚の間」のごときエロティックな観念連合の水準にとどまるものではないだろう。ラカンがこのゼミナールで主題化しているのは，何よりも反復強迫 *Wiederholungs-zwang* すなわち死の欲動 *Todestrieb* なのであった。

(…) 皆さんもまたご承知の通り，一方の手紙が殺し，他方の手紙が生かすということを我々は紛れもなく認めるわけです。シニフィアンというものが——皆さんは理解し始めたかもしれませんが——死の審級を物質化する限りにおいてですが。(Lacan: Id., p. 24 / *Schriften I*, S. 22)

「皆さんは理解し始めたかもしれませんが」というのはしかし，「理解に気をつけて！ Gardez-vous de comprendre!」(Ibid., p. 471) というラカンの戒めとともに聴き取られるべき言葉であろう。つまり「死」と言う場合，それは実存的なドラマなどではなく，単に主体が主体として現われるのを究極において可能にしており且つその限界でもあるもの，主体が仮象としてしか現れえないことに口を噤んでいるものの地点を言っているにすぎない。すなわち主体を束の間現出させる「妖かし」としての存在と無の往還。あるいはむしろこの「妖かし」を，そうと知りつつ「主体」の根源的な作用と認める思考を称してラカンもいちどは「存在論」と呼ぶのであった⁽⁸⁾。そこでは存在論が死の審級の別名となる。

(…) シニフィアンとは主体を表象し現前せしめるものですが、誰に
対してでしょうか？——他の主体に対してではなく、他のシニフィア
ンに対してです。この公理を明瞭なものとするために、皆さんが砂漠
で一面に象形文字の書かれた石を見つけたと仮定してみてください。
皆さんは、その背後にこの象形文字を書き起こした主体が隠れている
ことに、疑いを差し挟まないでしょう。けれど全てのシニフィアンが
皆さんに宛てて書かれているのだと思い込むならば、それは誤りです
ね——その証拠に皆さんは何も理解できないわけですから。むしろ皆
さんは、どのシニフィアンも各々別のどのシニフィアンとも関連して
いることが確かだと考えるので、象形文字をシニフィアンであると定
義するのです。そしてまさしくこのことが、主体の大文字他者の領野
への関係において肝心なことなのです。

主体は、あるシニフィアンが大文字他者の領野に浮かび現れる場合に
成立するのです。しかし同じ理由により——後にシニフィアンになる
ことがなければ、それに先立っては何ものでもなかったものが——シ
ニフィアンへと凝固するのです。(Lacan: *Le Séminaire Livre XI. Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*. Paris (Seuil)
1964, pp. 180 / *Das Seminar Buch XI. Die vier Grundbegriffe der Psychoanalyse*. Dt. v. N. Haas, Weinheim u. Berlin 1987, S. 208)

ある文書、作品、手紙などにおけるあらゆるシニフィアンが自分宛に書か
れていないし語られているのだ、と考えることは明らかに幻想である。
しかし、仮にヒエログリフが理解 verstehen されてしまえば、また読者が
理解したと信じてしまえば、つまり幻想が持たれてしまえば、そこから覚
醒せしめるものは何もない。19世紀の読書熱は、のべつこの幻想に導かれ
ていたものであるし、20世紀のテキストたるホーフマンスタールの『手
紙』や夏目漱石の『こゝろ』さえもが、恰も自分に宛てて書かれたもので
あるかのように好んで読まれるからくりもここにある。この詐術を解くた

めには、例えば今名を挙げた「手紙」における、そもそもそのような幻想に馴染まぬ部分、すなわちシニフィアン物質性を照射しなくてはならない。言語とりわけ外国語においてひとが眼にし、そして耳にすることができるのはシニフィアンだけなのである。それは場所なき差異の中から凝固 Gerinnen して現れる。

「何ごともし起きない＝場所を欠く n'avoir pas lieu」限り「何ものでもなかったもの」が「欠如としての場所を持つ」と換言されることで凝固するシニフィアンの論理に従って現れる主体は、存在と無へと分割されてシニフィアンへと繋ぎ止められる。そこではシニフィアンは、欠如を基盤とする主体の現れを可能とする根源的な分割そのものであるもので、確かに分割不可能であるように思われる。というのも、分割自体をさらに分割することはできないからである。

ラカンにおける、シニフィアンとともに現出するという主体の構想は、ハイデガーを想起させるものである。彼は『アンチゴネー』の第一の合唱第二の返歌をこう訳している。

Hochüberragend die Stätte, verlustig der Stätte / ist er, dem immer
das Unseiende seiend / der Wagnis zugunsten. (高ク聳エル場所、
ソノ場所ヲ失ウノダ／有ラヌモノヲ有リトスル者ハ／冒険ノタメナラ
ント) (Heidegger: *Hölderlins Hymne "Der Ister"*. In: Ders.:
Gesamtausgabe. Bd. 53, Frankfurt/M. 1984, S. 72. Et passim.)

もちろんこれは「人間」を主語に歌われたものだが、ラカンのいう分割と欠如を隠し持つ主体の現出も、これと異なる過程をたどるものではない。この点においてラカンとハイデガーは最も接近することになる。ラカンが引用したうえで以下のように説明するヘラクレイトスの断片は、この接近を示唆するかもしれない。

「*Biós* (弓)」と彼は書いています。叡智の教えについては、科学的

奮闘のあらゆる循環よりも先に目的へと到達するものだと言うことができますが、これもそのようなものとして我々の前へもたらされたのです。「弓には生命——Bios, アクセントは第一音節におかれますが——という名が賦与されているが、その作用はしかし死である。」欲動は初めからその全存在のうちに、弓の——あるいはむしろ弓術の、とすら言いたいところですが——弁証法を含んでいる。そしてまさしくこのようにして、私たちは欲動を、心的経済の中に位置づけることができる。(Lacan: *Les quatre concepts...*, p162 / *Die vier Grundbegriffe...*, S. 185f.)

他方ハイデガーもまた、戦後間もなく送り出された奇妙な「手紙」において、ヘラクレイトスと竈についての逸話を引用している。

ヘラクレイトスについては、彼のもとへと押しかけようとした見知らぬ人々に対して彼が言ったという言葉が物語られる。その人々は近寄りながら、彼が竈で暖を取っている様子を見た。彼らは驚いて立ちつくすのであったが、それはとりわけ、彼が彼ら逡巡する者たちに、次のような言葉で勇気を持つよう励まし、入ってくるように促したからである。「ここにも神々はいるのだから。」(Zit. n.: Heidegger: *Über den "Humanismus". Brief an Jean Beaufret, Paris*. In: Ders.: *Platons Lehre von der Wahrheit*. Bern 1947, S. 107)

「人間にとり固有の性質 *ethos* とは鬼神あるいは守護霊 *daemon* である。」と一般には受け取られているヘラクレイトスの言葉を、ハイデガーは「人間は人間である限り神の近くに住む」と独自に解釈するが、これはその傍証として、アリストテレスの『動物部分論』から引かれたものである。神々の棲家とヘラクレイトスが呼ぶ竈の炉辺は、ハイデガーにとっても到底単に「変哲のない場所 *gewöhnlicher Ort*」(Ebd., S. 109) であるとはいえない。というのも、1942年の講義では、やはり竈 *hestia* を「存在」と

等置さえしていたからである。

「竈」という語は何を指示しているのだろうか。竈とは故郷に-あることの場所である。(…) 竈の本質的なものとはしかし、火である。その本質の多様性において火は光ること、照らすこととして、暖めること、養うこと、浄めること、精錬すること、燃え上がることとしてある。(…) 竈はこの火を通じて、とどまる根拠であり定める中心である——言うなればあらゆる場所中の場所、故郷たる場所そのものであり、そこへと向かいつつ全ては互いが互いのもとにあり、互いが共に集いつつ臨在している、とはすなわちそもそも存在しているのである。(Heidegger: *Hölderlins Hymne "Der Ister"*. A. a. O., S. 130f.)

そもそもラカンがヘラクレイトスを Hermann Diels の『ソクラテス以前断片集 *Die Fragmente der Vorsokratiker*』（初版1903年）すなわちギリシャ語／ドイツ語対訳で読んでいたと思われる。これはハイデガーが時々流布訳として最初に掲げ、のちに近代主義的存在忘却の例として退けるものである。さにあらずともヘラクレイトスこそは、ラカンとハイデガーを最初に実定的 positiv につなぐ哲学者であった。しかし実定的、というのはハイデガー1950年のヘラクレイトスを論じた講演「ロゴス *Logos*」⁽⁹⁾をラカンがフランス語に訳しているのも、その文書によって両者の関係が schriftlich に裏付けられている、ということではない。両者の関係を本質的に問うならば、その実定性のより隠微な根拠へと踏み込むことが求められよう。マントルピースと竈はその特権的な場所であろう。

精神分析が解明する欲動と同じく *Biós*=*Bíos*, すなわち死 *Tod* を本質的作用とする生 *Leben*, つまり死を届ける生を、ラカンもハイデガーも他に知らぬわけではない。前者においてそれは科学に対する精神分析そのものであり、後者においては世界に対する芸術作品である。精神分析も芸術作品もそれ自体がひとつの欲動の名であるとする、それらはいふなれば科学および世界というものに潜む死の欲動であろう。ヴァーグナー『パ

ルジファル」の末尾で主人公は

die Wunde schließt / der Speer nur, der sie schlug. (此ノ傷口ヲ塞グノハ／其ヲ切り開イタ槍ノ他ニハナイ。) (Richard Wagner: *Par-sifal*. 3. Aufzug)

と歌う。ところでこの欲動の主体にとっての不可欠でもあり且つ致命的でもある本質は、またもやハイデガーが『アンチゴネー』の第一のコロスで歌われる「人間」に読み込むものであった。

Vielfältig das Unheimliche, nichts doch / über den Menschen hinaus Unheimlicheres ragend sich regt. / (…)/ Nicht werde dem Herde ein Trauter mir der, / nicht auch teile mit mir sein Wähnen mein Wissen, / der dieses führet ins Werk. (棲家ナキ不気味ナモノハ幾重ニモ、シカシ何モ／人間ヲ超エテ棲家ナキ不気味ナモノガ屹立シツツ活動スルコトハナイ。／(…)／竈ノモトデ私ニトリ親シキ者トハナラヌヨウニ／マタ彼ノ思念ガ私ノ知ト与ルコトノアラヌヨウニ／カカル仕業ヲ為ス者ハ。) (Heidegger: A. a. O., S. 151f. Et passim)

ハイデガーに従うなら、「私」の懸念にもかかわらず、「カカル仕業ヲ為ス者」こそは、「竈ノモトデ私ニトリ」最も「親シキ者」に他ならず、そして案ずる「私」もまた、このことを退けつつ望むのである。

これをそのまま精神分析と科学の、そして芸術作品と世界の（ある時期のラカンの用語で言えば間主体的な、そしてハイデガーに従えば技術 Technik が打ち建てる）関係と呼べるだろうか。つまり、こうである。精神分析は科学から非科学へと、芸術は世界から非世界へと離脱するのだが、それは科学そして世界へと回帰するためである。あるいは離脱したと見えるところでは、既に立ち戻っているのだ。精神分析と芸術は自らが科学へそ

して世界へと切り開いた、燃えるような傷口=竈——およそ主体とはここ以外の何処に現れうるだろうか——へと「介入」するのだが、それが届けるのは実は死である。

しかしこれが（ハイデガーを引くラカンに従えば）隠れなさへともたらされた真理 aletheia=Unverborgenheit であるとしても、離脱するものがそのまま回帰するのではない。「死」について知は、それについていかなる知も関与しえぬことを知るのみだからである。それは unheimlich なものの到来なのである。（彼ノ思念が私ノ知ト与ルコトノアラヌヨウニ）…

（コロスの）末尾の言葉は、竈という語で故郷に属するもの das Heimische を名指し、その内で故郷に属さずあること das Unheimischsein を語るのである。というのもこの言葉は、故郷に属するものへの帰属性 die Zugehörigkeit zum Heimischen と、故郷に属さぬものが故郷へ属しえぬこと das Nichtheimischsein des Unheimischen とを語るからである。さて、これら全ては実際明確ならざるものにとどまっている。ただ、この明確ならざるものは、詩作する語りにおけるこの頂点にあっては、空虚なものや曖昧で殆ど任意のものが不明確性を有することなどではありえない。明確ならざるもの、あるいは我々がそう呼ぶものが、未だ決定されざるものでありながらもこの詩作にとって、この詩作において決定されねばならぬものなのである。見たところ明確ならざるものが、最高度に確定された一なるもの、全詩作にとって、自らによって予め詩作されるべきものとしてあり続ける唯一なるものなのである。詩作の、詩作に値するものとは、故郷に属さずあることのうちに故郷に属するものとなること das Heimischwerden im Unheimischsein である。アンチゴネー自らが、故郷に属さずあることのうちに故郷に属するものとなることの詩なのである。アンチゴネーは最高度の、そして本来的な、故郷に属さずあることの詩なのである。このことの中にはしかし以下のことが含まれている。人間のこの存在、すなわち人間が存在者の只中において故郷に属さず

-属しつつあることは詩作されつつ語られるのである、ということが。なぜならば人間の存在は、常に冒険 Wagnis という存在しうること Seinkönnen として——詩作されるべきものでありまた詩作として決定しうるものとしてのみとどまるからである。(Ebd., S. 151)

故郷に属するもの das Heimische と、故郷に属せぬもの das Unheimische とが、故郷に属するものとなること das Heimischwerden, 属する存在たりうる das Heimischseinkönnen ことをめぐって繰り広げる決定不能性は、詩作において決着を見なくてはならない。アンチゴネーがこの詩作「である」とは、アンチゴネーにおいて決定が下されているということに他ならない。決定を下す主体ですらなく、アンチゴネー自身が決定である。これはどういうことか。

ハイデガーのテキストにおいて「アンチゴネー」は、「人間の法」というシニフィアンに対して、unheimisch-unheimlich な主体あるいは das Unheimisch-Unheimliche という主体を現出せしめる。しかし unheimisch な彼方へと連れ去られるアンチゴネーが heimisch なものたりえるか否かが不明確なのは、アンチゴネーの赴く石の塚すなわち「燃焼なき竈」に(少なくともハイデガーが)「人間」存在の故郷とは別の「存在の故郷」を見抜くからであろう。アンチゴネーは「帰郷」とは無縁である。人間存在のあらゆる heimisch なものに挑戦し介入する unheimlich な決定すなわち詩作として、場所を持たぬままに全く新たな存在を開始しているのである。そのときアンチゴネーは、「どこへ行こうとそれが存在するところに存在するであろうし、且つ存在しないだろう」。ハイデガーの存在論においてアンチゴネーという名は、主体の位置に人間を超えた「存在」を代理し表象するシニフィアンとなる。コロスの末尾は、これが届けられぬことを望みつつ、それが届くことも知っているのである。この到来を受け取るところに「存在の思考」が始まるのだが、ギリシャ悲劇を参照する1942年のハイデガーは、そこに不穏な出来事を認めずにはいない。

ところが先にも引いた、敗戦後間もなくバリのジャン・ボーフレに宛て

て書かれたものに立脚する、いわゆる1947年の「ヒューマンズム書簡」は、「存在の思考」に踏み込んでいながらも、その跨ぎ越しから劇的な色彩は払拭され、醒めた記述に転じている。

しかし思考とは、未だ思考されざるものへの探索と問い出しとしてのみならず、冒険 *aventure* なのである。思考とは、存在の思考としてのその本質において、同じこの存在によって要-求されて in *Anspruch genommen* [=語りかけの中へと取り込まれて] いるのである。思考は到来するもの *l'avenant* としての存在へと関与させられている。思考は思考としては、存在の到来へと、到来としての存在へと結びついている。存在は自らを思考へと既に送り届けている。存在は思考の定め *Geschick* としてあるのである。(Ders.: *Über den Humanismus*. A. a. O., S. 117)

存在は思考へと既に届けられているのであれば、このことが忘れられていない限り、この手紙は書かれる必要も差し出される必要も、受け取られ読まれる必要もない。手紙の到来はいかなる事件でもない。あるいは到来自体が事件などではないことを想起させる事件でしかない。思考とは到来＝未来と常に既に関わっているものなのである。

さらにハイデガーは倫理 *Ethik* を原語 *ethos* へと返し、さきのヘラクレイトスの言葉を介して、*ethos* とは思考する人間の「逗留する場所 *Aufenthalt*」のことでであると定める。すなわち倫理とは存在の思考の場である。到来を思考し続ける思考は回答なき問いの周囲に集う。回答なき問いについて思考⁽¹⁰⁾ する言葉 *Sprache* という「最も危険な財 *der Güter Gefährlichstes*」(ヘルダーリン) は、いわゆる存在の家の門を叩き、その竈を囲むのである。恐らくここにおいて、*Heimischseinkönnen des Unheimischen* が繰り返し試されているのであり、この反復される試練においては、あらゆる言葉が存在のシニフィアンとなる。そしてこれが肝心な点なのだが、存在の思考の場においては、もはや「人間」が問われぬだ

けではなく、いかなる起源の特権化も放棄されるのだということである。というのも「最も危険な財」の到来とは、起源を全く異にするものの到来だからである。

ハイデガー1942年のテキストに戻ろう。これはヘルダーリーンがイスター der Ister すなわちドナウ河 die Donau (der Ister は元来下流部分を呼ぶ古名) を歌った未完の賛歌、ヘリングラートにより「イスター」と名づけられた詩について語られたものであった。南北に流れるラインと異なり東西に、正確には東漸する大河たるドナウ=イスターについてヘルダーリーンはしかし、こう歌う。

Der scheint aber fast / Rückwärts zu gehen und / Ich mein, er
müsse kommen / Von Osten. (ソレハシカシ恰モ／逆向キニ行クヨ
ウニ見エ／私が思ウニツマリ、ソレガ来ルニチガイナイノハ／東カラ
デハナイカ。)

ハイデガーが他でもないこの時期に「東方」へと向かうようである。「東方」より到来するという動きと「故郷」という問題系に触れるヘルダーリーンの詩を扱った経緯についてはこれ以上詮索しないが、ヘルダーリーンの歌うイスターの流れとアンチゴネーとの間に設えられた平行性は、存在論上の必然性に貫かれている。還ってくるためには送り出さねばならないのは当然だが、そのようなことですらくなく、送り出すことが到来なのであり、しかも全く新たなもの、他なるものの到来なのである。この詩作「イスター」もまた、詩作の成立を自己言及的にこう歌っている。

(…) Ein Zeichen braucht es, / Nichts anderes, schlecht und recht,
damit es Sonn' / Und Mond trag' im Gemüth', untrennbar, / Und
fortgeh, Tag und Nacht auch, und / Die Himmlischen warm sich
fühlen aneinander. (一ツノ記号ガ必要ナノダ、／他デモナク、単ニ
ソシテ純ニ、ソレガ日ト／月ヲ心ニ戴キ、分カチ難ク、／進ミユクタ

メニハ、昼モ夜モ、ソシテ／天ナルモノドモガ暖カニ互イヲ感ジ合ウ
タメニハ。)

「一ツノ記号」が必要なのは、人間の存立や存続のためではもはやない。
それは、天球が互いに不即不離の運行を続けるためなのである。詩作の残
された部分の最後にはこうある。

Was aber jener thuet der Strom, / Weis niemand.

流レガシカシ何ヲナスノカ——何を流し寄越すのか——知ル者ハナシ。
Biós と Bíos の交わる地点において開始される詩作 Dichtung / poiesis は
もはや、誰の知をも宛先とするものではない。しかし確かなのは、そこで
何かがなされ、何かが流し寄越されるということである。問われるのは
「誰 wer」ではない。「誰」の彼岸に「何 was」の思考が求められ、始ま
るのである。そしてこの「何」への問いは、既に思考に届けられている。

ラカンが主体について語るとおり、これを「死」が既に届けられている
のだ、と取るか、それともデリダのいうように、届いているのは「問い」
なのだからまだ部分的に未到着分の残余が決して尽きることなくある、と
考えるか、この正誤を二者択一的に論理の上で決定することはできない。
というのもこれは、「始まり」の倫理と「終わり」に抵抗する倫理との拮
抗に関わる問いかけだからである。一言で言えば、機械的反復を必然と見
なすか、反復の中に表象不能な外部性の不意の現前を認めるか、ラカンの
区別に倣えば自-動性 automaton か偶然 tyché か、という態度の違いであ
ろう。後者に拠るデリダにおいては、自分自身を喰らう主体が tyché とと
もに、tyché として反復され、それは「終わり」であることを繰り返し終
わらせる。ラカンは（一般的な印象は別であるかもしれないが） automa-
ton を tyché へと不断に差し戻し劇化するような議論を結局回避し、
tyché もそれに従うような高次の automaton の倫理を「主体」の位置に
——「主体」に代えて——構築しようとしていたのではないか。そしてこ

の選択においてラカンは、後期ハイデガーを「始まり」の思索者として引き継ぐことになるのではないか。両者においてそこで問われるべき「何」とは、人間存在に代わって前景化する何ものかであり、それを差し当たり技術 *Technik* と呼ぶことができるように思われる。

注

引用の出典は本文中括弧内に表示。ラカンについては（仏語原典／独語訳）の順。

- (1) ラカンの上記ゼミナールに対してデリダが1975年の論文「真実の配達人」で応酬したことは、よく知られている。ラカンもデリダも共にフロイトの精神分析に各々の理論に関して多くを負っていることは明らかだが、殊「手紙」という主題に関する不一致は個別各論的なものではなく、フロイトを継承する際の原理的な不一致であろうと思われるが、両者の関係へと論を及ぼすことは紙幅の観点から見送った。
- (2) 拙論「有事と越境——ハイデガーの Ding／ラカンの Ding——」『フランス哲学・思想研究』第7号（日仏哲学会編）2002年、20-39頁。
- (3) Z. B. vgl.: Allerkamp, Andrea: *Rhetorik des Anfangs. Über die Anrufung als inaugurative Kraft*. In: Tholen, G.-Chr., Schmitz, G. u. Riepe, M. (Hrsg.): *Übertragung - Übersetzung - Überlieferung. Episteme und Sprache in der Psychoanalyse Lacans*. Bielefeld 2001, S. 257-270 / Gondek, Hans-Dieter: *Subjekt, Sprache und Erkenntnis. Philosophische Zugänge zur Lacanschen Psychoanalyse*. In: Ders., Hofmann, R. u. Lohmann, H.-M.: *Jacques Lacan - Wege zu seinem Werk*. Stuttgart 2001, S. 130-163.
- (4) Freud, Sigmund: *Jenseits des Lustprinzips*. In: Ders.: *Studienausgabe*. Hrsg. v. Mitscherlich, A. u. a., Frankfurt/M. 1969-75, Bd. III, S. 213-272.
- (5) Derrida, Jacques: *Die Postkarte von Sokrates bis an Freud und jenseits*. Autorisierte Übersetzung des «*Le carte postale de Socrate à Freud et au-delà*», Paris (Flammarion) 1980, von Metzger, H.-J., Berlin 1987, S. 243-245.
- (6) Bonaparte, Marie: *The Life and Works of Edgar Allan Poe. An Psycho-Analytic Interpretation*. London (Imago) 1949, pp. 483-485. ラカンの黙殺については: Derrida: A. a. O., S. 218-225.
- (7) Ders.: *Séminaire VII. L'Éthique de la psychanalyse*. Paris (Seuil)

1986, p. 152 / *Die Ethik der Psychoanalyse*. Dt. v. Haas, N., Weinheim u. Berlin 1996, S. 157.

- (8) Heidegger, Martin: *Logos (Heraklit, Fragment 50)*. In: Ders.: *Vorträge und Aufsätze*. Stuttgart 1954, S. 199-221.
- (9) ポスト存在論者スローターダイクは、ハイデガーにおける言語の外来性を（恐らく故意に）看過している。Vgl.: Sloterdijk, Peter: *Die Regeln für den Menschenpark*. In: Ders.: *Nicht gerettet. Versuche nach Heidegger*. Frankfurt/M. 2001, S. 302-337.
- (10) Friedrich Hölderlin: *"Der Ister"*. In: Ders.: *Sämtliche Werke*. Histor.-kritische Ausgabe, beg. durch Hellingrath, N. v., fortg. durch Seebass, Fr. u. Pigenot, L. v., Berlin ²1922f., Bd. IV, 220ff. に拠った。今日多く底本とされる Beißner 編 Stuttgarter Ausgabe および Settler 編 Frankfurter Ausgabe とは少なからぬ異同があるが、本稿では議論の範囲としない。